

## 負の感情をのりこえる語り——「がんばろう、日本」と「アイ・ラブ・ニューヨーク」

やまだようこ（京都大学大学院教育学研究科教授）

Yoko YAMADA



1948年岐阜市生まれ。京都大学大学院教育学研究科教授、教育学博士。2012年4月より京都大学名誉教授、立命館大学特別招聘教授に就任。専門は、生涯発達心理学、ナラティブ心理学、描画イメージの心理学、文化心理学。著書に『やまだようこ著作集』全12巻（新曜社）のほか、『ことばの前のことば——ことばが生まれるすじみち1』（新曜社）、『私をつつむ母なるもの——イメージ画にみる日本文化の心理』（有斐閣）など多数。

### 語りの力

未曾有の東日本大震災が起こった。今こそ、ナラティブ（語り、物語）やことばの力が試されているような気がする。ナラティブとは、「2つ以上の出来事をむすびつける行為」である。私たちは、現実には起こった出来事を変えることはできないが、それらをどのようなことばと「むすぶ」かによって、経験の組織化と意味づけ方は変えることができる。物語によって未来をつくっていくこと

もできる。

私たちの文化には、不幸な出来事に出会ったときに活用できる、多くの物語がすでに蓄えられている。ある文化に共通する集合的で定型的な語りを、文化的ナラティブと呼ぶことができるだろう。文化的ナラティブは、その文化に属する人は誰もが知っている日常的で平凡なことばで出来ているが、いざというときには渦のように自然に巻き起こって次々に語り直され、言い換えられ、バージョンを変えながら口コミで波及する。

東日本大震災3.11のあとは「がんばろう、日本」の大合唱が起こった。「がんばれ、東北」「がんばってます、石巻」など多様な語り口を生みながら急速に広がった。これらは突然起こった理不尽で国全体を揺るがすネガティブな出来事を、共同体が集団で団結して乗り越えようとするときの文化的ナラティブである。

文化的ナラティブは、ときにマスター・ナラティブ（支配的語り）になる。権威者や支配者が用いると政治的に利用されやすい。定型的で紋切り型であるから、オリジナリティを重視する研究者や芸術家からも評判がよくない。「がんばろう、日本」は、大衆に広く普及したが、2011年の流行語大賞に選ばれるどころか、ノミネートされることもなく無視された。しかし、日常の何げない単純なことば、平凡で定型的で集合的な語りこそ、人びとが負の感情をのりこえ苦境のなかで生き抜くときの知恵として実生活で活用される。それらは、良きにせよ悪しきにせよ、私たちの生活や人生のなかに奥深く浸透し、広く早く伝わる力をもってい

るのである。

### 「がんばれ、日本」の多様な変奏

震災の直後、2011年3月13日、英国の新聞インディペンデント（日曜版）は、1面全体に赤い日の丸を描き、日本語で「がんばれ、日本。がんばれ、東北。」と応援メッセージを掲載した（図1）。

この語りは日本人を励まし、世界中に共鳴の語りの変奏を生み出した。当事者も支援者も同様の語りをを用い、立場のちがいにいかかわらず、多様な変異形と微妙にズレをもつ意味になって「うたう」ように波紋を拡げていった（図2～図4参照）。

ここに掲載した図は、比較的公的に使われたステッカーなどの例であるが、はちまき、手ぬぐい、ポスター、立て看板、うちわ、シャツ、バックなど多様な媒体に、似たデザインと語りが使われて普及した。

また、新聞記事やブログ、個人の投書やツイッターでも、「がんばれ」「がんばって」「がんばろう」「みんなががんばろう」「よくがんばった」「がんばりすぎないで」「がんばらなくていいよ」など、単純ながら多様な変奏をもつ「ガンバレ・コール」が、つぎつぎに交わされた。

情報伝達のナラティブは、相手に伝わって目的を達すれば、解消され消えていく。それに対して負の感情をのりこえる文化的ナラティブは、自分流にバージョンを変え、文脈にあわせて変奏されながら、自分の感情を鎮めるとともに他者を共鳴的に巻き込む力もち、多様なバリエーションを伴いながら波及するといえよう。



図1 2011年3月13日付の英紙インディペンデント・オン・サンデーの1面トップ (Reproduced with permission from The Independent)



図3 東北観光振興ポータルサイト



図2 被災地復興支援プロジェクト・ステッカー



図4「がんばろう ふくしま」福島県

## アイ・ラブ・ニューヨーク (I love New York)

「がんばろう、日本」の大合唱は、アメリカの同時多発テロ9.11のときに起こった“I love New York”や“We love America”の大合唱に匹敵するだろう。両方とも国旗がシンボルとして使われることも多く(図5、図6参照)、さまざまなバリエーションを生みながら世界中に広まった。

国や共同体が震撼するような危機や災害に見舞われると、それを取り返す(redemptive)文化的ナラティブが自然に同時に巻き起こるのである。これらのナラティブは個人の負の感情を表現し、集団のなかで人と人とのむすびつきや共鳴を高めて、ポジティブな方向に前進させるために大きな力をもつ。それと同時に、マスター・ナラティブとして使われる危険も生じる。

2つの文化的ナラティブを比較すると、共通性が見出されるとともに相違点もある。アメリカでは、個人としての自己が主語で、「愛する」という主体的行為が国や都市や人びとに向けられた。同時に「神がアメリカを祝福しますように“God bless America”」など宗教的ことばも多く見られた。日本では、主語はなく「がんばろう」という集団による意志表示が国や都市や人びとに向けられた。宗教的なことばは連動せず、あくまで集合体の一員としての絆を自覚し相互にむすびつけることばとして機能したようである。

「ラブ」という英語の日常語のもつ広く深く、人びとの心を情動的に揺り動かす豊かな意味は、日本語にはうまく訳すことができない。毎日のように気楽に使うことばであるとともに、大切な人を喪失したとき、その人との関係をあらわすとき、その人を追悼するとき、もっとも重要なことばになる。個人的な感情をあらわすとともに、宗教的な深さも、哀悼もあわせもつ。「愛する」「ほれ

る」「恋う」「好き」「いとしい」「慈しむ」「祝福する」「大切にする」「大事にする」、どれも不十分だろう。

## 「がんばる」と 「持ちこたえる(hold on)」

「がんばる」の豊かな深い意味も、外国語には訳しにくい。インディペンデント紙(図1)では、「がんばれ、日本」の下に、“Don’t give up, Japan”(あきらめるな、日本)という英語がつけられていた。その後の海外ネットでは、「Ganbare」という日本語がそのまま使われることもある。

「がんばる」は、文脈によって多義的に使われる興味深い日本語である。スポーツ応援の「がんばれ」は、「ファイト(fight 闘志)」だろう。「ふくしま」のステッカー(図4)は、ファイトになっている。しかし、「困難にめげず気丈に耐える(タフtough)」という意味のほうがふさわしいときも多い。駅で見送るときの「がんばってね」は、「お元気で(good luck)」というニュアンスになる。

「がんばる」は、懸命に努力する意味もあるが、積極的にアクションを起こす行為とはいえない。英語にすれば“hold on”, “preserve”などにあたり、「抵抗する」「忍耐する」「持続する」「保持する」というニュアンスが強い。震災が報道されたときに世界が驚いたのも、想像を超える負の出来事に遭遇して、忍耐強くがんばる日本人だったと考えられる。

ジョン・レノン、ビートルズ解散後の辛い時代に、「ホールド・オン(HOLD ON)」という歌をつくっている。日本語に訳せば、「がんばれ」「しっかり」というような意味になる。彼は、自分に向かって「がんばれ、ジョン。ジョン、がんばれ」と繰り返しつつおやく。「君がひとりぼっちで、他に誰もいないとき、ただ自分を保つのだ、そして自分に言うのだ、がんばれ」。この歌は、困難

なときに自分で自分に言い聞かせる「がんばれ」ということばの働きをよく示している。

「がんばる」という日本語は、「あきらめない」「持ちこたえる」「しっかりする」「ふだんの自分を守りつづける」「負の感情を抱えながらがまんして生きる」へと意味のむすびつきを広げて深めていくことができるだろう。

ナラティブは、自分と同伴する物語として機能し、「自分自身を持ちこたえる」(holding one’s own)働きをもつ。他者に語るナラティブは、自分自身に言い聞かせるナラティブでもある。困難なときに自分を励まし、自分を保持し、そして再び他者へと共感を広げる働きをする。「でも、がんばろう」と負を転じる語りは、日本文化のなかに生きるしたたかな共同生成のナラティブといえよう。

「がんばろう」のほかに「ありがとう」も、喪失に出会ったときの興味深い文化的ナラティブとして、私は注目してきた。負の感情に打ち負かされそうになるときに、「がんばろう」「ありがとう」など自分にも相手にも呼びかけることのできる文化的ナラティブを私たちはすでに持っており、必要なときに文脈に応じて使うことができるのである。

### 参考文献

やまだようこ『喪失の語り——生成のライフストーリー』(やまだようこ著作集第8巻)新曜社、2007年。

やまだようこ「不幸を転じるナラティブ——東日本大震災「がんばろう」の語り」、子安増生・杉本均編『幸福感を紡ぐ人間関係と教育』ナカニシヤ出版、2012年、27-39頁。



図5 I love New York  
2001.9.11後のニューヨーク、グラウンド・ゼロにて  
(2002年8月伊藤哲司氏撮影、図6も同様)



図6 We love New York, God bless America